イケメソ

山口

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
イケメソ

【Ｎコード】
Ｎ６１２３Ｌ

【作者名】
山口

【あらすじ】
イケメンが来るというのでわくわくしてたら、来たのは変質者でした。

第一話

心が寒い。

八月になり気温は三十度を超えているというのに、私の心は氷点下だ。このままでは、心の中で鼻水を垂らしてしまう。さらに、それが唇の辺りにまで及んできて凍りつき、口が開かなくなってご飯が食べられなくなる。こうなると、私はめでたく心の中で餓死してしまうわけだ。

こんなわけのわからないことを普通に考えているところを見ると、いよいよ頭がおかしくなってしまったらしい。それでも別に困らない。私の人生は、すでに終了しているからだ。

今年で二十八歳になるのに、結婚もしていなければ彼氏もいない。職業は事務員。給料は月十二万で、昇給もボーナスもない。住んでいるのは六畳一間、家賃が月四万のボロアパートだ。

この歳で年収が百四十二万、男の一人もいないなんて悲惨すぎる。ところで、今もう一度年収を計算したら百四十四万の間違いだった。いよいよ掛け算もできなくなったらしい。こんなバカは小学校からやり直すべきだ。神様、私の人生を巻き戻してください。十円あげるから。

部屋の畳の上でうつぶせになっていると、なんだか死にたくなってきた。

「死にたい死にたい死にたい死にたい」

その後「死にたい」を二百回ほど連発したが、一向に死ねない。当たり前だ。こぼした牛乳をふいた雑巾を放置すると、殺人的な臭さになるのと同じくらい当たり前だ。あまりに臭いので年下の友人にプレゼントしたら、「雑巾ババア」というあだ名をつけられてしまったのと同じくらい当たり前だ。こんな人生の真理を簡単に発見してしまう自分の才能が怖ろしすぎて、また死にたくなる。

第二話

こんなときは、つい昔のことを思い出してしまう。
高校生だった頃、私は剣道部のエースだった。全国大会で上位に食い込むほどの実力であったから、注目される度合いが大きい。さらに、自分で言うのもなんだがかなりの美人だった。色白の肌に整った顔立ち、ほっそりした体つきをしており、周囲の女子たちにいつも羨ましがられていたものだ。
当然ながら、告白してくる男子が後を絶たなかった。ところが当時は剣道のことしか頭になかったため、ことごとく断ってしまった。今の私がそこにいたなら、過去の自分の首を絞めてでも男子とつき合わせただろう。もっとも過去の自分が今の私を見たら、その変貌ぶりにショック死するかもしれない。当時は四十キロ台だった体重が、今は六十キロ近くにまで増えてしまっているのだ。もはや、自分が人間なのか豚なのかよくわからない。
誰か私の代わりに、「人間は進化すると豚になる」という学説を発表してほしい。「進化じゃなくて退化だろ」と突っ込む奴がいたら、「お前の血は何色だあああ！」と叫びながらそいつにケチャップをぶちまけ、仕上げにアップルパイを顔面にヒットさせることをお勧めしたい。そこまでやれば、よほどのツワモノでない限り黙るはずだ。
なんだか気分が悪くなってきたので、テレビをつけることにした。すると、「豚丼一杯二百五十円！」などという失礼千万なＣＭを放送している。そんなに共食いをさせたいのだろうか。顔をしかめながらチャンネルを変えると、アニメをやっている。どんな内容なのだろうと思いながら観ていると、飛行機に乗った豚が飛んできてこう言った。
「モテねえ豚は、ただの豚だ」
次の瞬間、私はテレビに向かって掃除機を放り投げていた。

「うるせえ、機械の分際で偉そうに！　誰が電気代払ってると思ってんだ、このポンコツ野郎！」
こんな大騒ぎをしたら、近所迷惑だ。苦情が来ても仕方がない。ところが、私はすでに他の住民から「危ない女」というレッテルを貼られているため、誰も文句を言いにこないのだ。キチガイの特権と言っていいだろう。キチガイ万歳。
それはさておき、私の華麗な一撃によってテレビが壊れてしまった。掃除機をぶつけたくらいで昇天してしまうなんて、電化製品の風上にも置けない。きっと、わずかな衝撃でも壊れてしまうように設計されているのだろう。それで新しい製品を売りつけるというわけだ。私は、メーカーの陰謀を暴いてしまった。自分の聡明さが恐すぎて死にたくなる。

第三話

テレビが壊れてしまい、することがなくなった私はひたすら横になっていた。

「もういいよー、誰か殺してよー」

こんな言葉が口をついて出るところを見ると、いよいよ神経科のお世話になるときが来たようだ。品行方正だった私がこんなにおかしくなったのは、病気のせいに違いない。それを治療しつつダイエットに励めば、元のモテ女に返り咲きだ。顔が少し老けてしまっのは化粧でごまかせるし、いざとなれば美容整形という手もある。

「思い立ったが吉日」という言葉もあることだし、さっそく実行に移そう。診察予約をするために起き上がると、自分の前に妙な生き物がちょこんと座っているのに気づいた。よく見るとアマガエルのようだ。

「何こいつ、どこから入ったの」

私は、ヘビやカエルの類が大の苦手だ。できればさわりたくないし、近寄りたくもない。それなのにこの緑野郎は、図々しくも人の豪邸に土足で上がり込んできたのだ。

「どうしよう……」

私は途方に暮れてしまった。できればさっさと出ていってほしいが、奴はこの家を気に入ってしまったらしく動こうとしない。こちらから近寄れない以上、追い出すのは無理だ。かと言って、カエルを捕まえるためにわざわざ友だちを呼ぶのも気が引ける。

散々考えたあげく、掃除機を使うことにした。これで遠くから緑野郎を吸い込んで、外に出してしまうのだ。こんなグッドアイディアをさらっと思いついてしまう辺り、実は天才なんじゃないだろうか。

掃除機の先端を近づけると、カエルが突然声を上げた。

「こら、何をする！」

私は仰天して尻餅をついてしまった。今まで生きてきた中で一番の

珍事だ。慌てふためきながらもじっと見ると、奴はおごそかにこう言った。
「私は、神だ」
あり得ない。こんなことがあっていいはずがない。と言うか、その姿で神はないだろう。しかし、こうして人語を解している以上ただのカエルでないことは明らかだ。私はおそるおそる尋ねてみた。
「本当に神なら、私の願い事を聞いてくれますか？」
「お安い御用だ」
私は、はやる心を抑えながら訴えた。
「お金をください。贅沢は言いません、百兆円あれば充分です」

第四話

すると、カエルは私の顔を見つめた。
「それはできんな」
「どうしてですか、この緑野郎……じゃなくて神様！」
「勝手に日本銀行券を作ったら、それは偽札だ。使えば逮捕される危険性もある」
私は唇を噛んだ。悔しいがその通りだ。
「じゃあ、お金はいいです。私を美人にしてください！」
「美容外科に行け」
本当にムカつくカエルだ。今度から心の中でムカエルと呼んでやろう。大天使ミカエルをパクッたような名前は、このインチキ臭い神にぴったりだ。
「じゃあ、なんでも言うことを聞くイケメンを出してください」
「それもできんな」
私は、踏み潰したくなるのを必死にこらえながら尋ねた。
「その理由は？」
「勝手につれてきてお前の下僕にしたら、その男の人生が狂ってしまう」
もう限界が近い。プチッと潰してしまいそうだ。
「じゃあ、何ができるんですか！」
眉を吊り上げながら叫ぶと、ムカエルはおもむろに答えた。
「イケメンは呼べないが、イケメソなら呼べる」
私は目をしばたたいた。
「イケ『めん』じゃなくてイケ『めそ』？　どう違うの」
「イケメソはイケメン以上の存在だ」
願ってもない話に、私は身を乗り出した。
「呼んで呼んで、今すぐ呼んで！」
「そう言うだろうと思い、すでに呼んである。そろそろ来るはずだ」

まさか、こんなところで幸運をつかめるとは思ってもみなかった。
期待に胸をふくらませていると、玄関のインターホンが鳴った。
「はいはーい、イケメソさんですか？」
そう尋ねると、さわやかな青年の声が返ってきた。
「その通りです、お嬢様」
私はすっかり舞い上がってしまった。
「お嬢様だなんて、そんな……今開けるから待っててね！」
いそいそとドアを開けると、そこに立っていたのは全身白タイツ姿の人間だった。なぜか顔に四角い紙袋をかぶっており、目の位置に丸い穴が空いている。
私はしばらく呆然としていたが、やがて気を取り直して彼を怒鳴りつけた。
「なんじゃい、おのれは！」
「イケメソです」

第五話

私は、がっくりと肩を落とした。
「どんなイケメンが来るのかと期待したら、来たのは変質者でした。あはは、あはは」
もう笑いしか出てこない。
「お気に召しませんか、お嬢様」
「当たり前でしょ、その全身タイツ脱いでよ。あと、その紙袋も取ってよ！」
イケメソは首を振った。
「それはできません。私は地球の外気に触れると死んでしまうのです」
「どんだけデリケートなの、この変質者は」
「その代わり、様々な特技があります」
彼は玄関から外に出ると、巨大な布袋を引きずりながら入ってきた。
「何それ」
「イケメソ福袋とでも呼んでください」
突っ込む気力すらなくなった私は、その場に寝転がってしまった。
「もういいから、出てって。そこの変なカエルと一緒にね」
「まあまあ、そう言わずに」
イケメソは布袋から缶ジュースを取り出した。
「これをお飲みください」
「は？　別に喉渇いてないし」
「飲めば若返りますよ」
私はむくりと起き上がり、イケメソをにらみつけた。
「嘘だったら怒るよ」
「どうぞどうぞ」
私は缶ジュースのふたを開け、一気に飲み干した。しかし、なんの変化もない。

「やっぱり嘘じゃないの！」
そう叫んだ途端、自分の体が震えだした。
「えっ、何これ」
慌てふためいていると、全身を強烈な炭酸水が駆け巡っているような感覚に襲われた。私は思わず叫んだ。
「すごい、気持ちいい！」

第六話

間もなく、その感覚は収まった。急いで鏡を見てみると、二十歳頃の自分の顔が映っていた。
当時の私はミス・キャンパスに選ばれるほどの美貌を誇り、イケメンの彼氏が三人いた。剣道をやめたことで心にぽっかり穴が空いてしまい、それを埋めるために男を漁っていたのだ。三股かけていたことが彼らにばれてしまい、呼び出されて絶対絶命のピンチに陥った思い出もある。あのときの私が帰ってきたのだ。
「おっしゃあああ！」
叫ばずにはいられなかった。これで、底辺人生とおさらばだ。金持ちのイケメンでも引っ掛ければ、今の状況から抜け出すことはたやすい。
「これで勝ち組の仲間入りだよ。あはは、あーっははは！」
あごがはずれそうになるほどの馬鹿笑いをしていると、イケメソがぼそりと言った。
「その効果、五分で切れますんで」
思わずイケメソの脳天に空手チョップをかました。
「ぬか喜びさせんじゃねえ！」
彼は、ずれた紙袋を直しながら言った。
「体が若返っても、曲がった性格はそのままなんですね」
「うるさいうるさいうるさーい！」
再び空手チョップをかますと、イケメソの紙袋がまたずれた。彼は大きなため息をつき、しみじみとこう言った。
「客観的に言わせていただきますと、あなたの外見は以前とさほど変わっていません。人生が暗転した原因は、むしろ内面にあるものと思われます」
「適当なことほざきやがって。私がデブスだからってバカにしてんだろ、お前！」

第七話

イケメソは首を振り、穏やかな声で言った。
「馬鹿になどしておりません」
「本当かなあ、怪しいもんだよ」
すると彼はしばらく沈黙し、おもむろに口を開いた。
「あなたは大学生のときに三人の男性と同時につき合い、結局全員と別れるはめになりました。なぜそうなってしまったかわかりますか」
「そりゃ、三股かけてたのがバレたからでしょ」
「そうです。つまり、あなた自身の行いが破滅をもたらしたのです」
今度は私が黙り込む番だった。
「その後、周囲のあなたに対する評価は失墜しました。下劣な品性が露見してしまったからです」
何も言えずにうつむいていると、彼はさらにまくし立てた。
「あなたは、そのとき改心すればよかった。ところが愚かにも同じことを繰り返しました。在学中も、社会人になってからもです。結局、あなたの前には一人も男がいなくなりました。これは容色が衰えたことによるものではなく、その本性がすっかり知れ渡ってしまったことによります」
私は必死で首を振った。
「違うよ、違う。私がこんな人生を送るはめになったのは、全部外見のせいで……」
「それこそ違います。こうして再確認したところ、大学生の頃のあなたと現在のあなたの間にたいした差はありません。大きな差があるように見えるのは、単に思い込みによる錯覚です」
私は、一言も言い返すことができずにうつむいた。確かに思い当たるふしはある。
友だちに「ブスで困る」と愚痴をこぼすと、決まって「どこが」と

いう反応が返ってくる。また、「男がいない」と愚痴をこぼすと「当たり前でしょ」という反応と共に蔑んだ目で見られる。なんでだろうと常々疑問に思っていたのだが、今にしてようやくその理由がわかった。

私は品性が下劣な人間であり、しかもそれに気づかないほどのバカだったのだ。

第八話

しかし、そんな事実は認めたくなかった。
「イケメソ、よく聞いて。私は最近太ってきたせいで自信がなくなっちゃったんだよ。もちろん男性にも相手にされなくなった。それで孤独のあまり、最近おかしく……」
「ですから、男性に相手にされなくなったのはあなたの行いが原因だと申し上げているでしょう。何度同じことを言わせる気ですか」
彼のはねつけるような物言いに、私はすっかり縮こまってしまった。しかし、一方的にやり込められているのが癪にさわって仕方がない。ここで一発、反撃しておきたいところだ。
「ところで、なんであなたは私の過去を知ってるわけ？　すごくキモいんだけど」
「それは、私が神の使徒だからです。なんでもお見通しなのです」
「嘘言わないで、このストーカー野郎。どうやって調べたのか白状しなよ」
「いいんですか、そんな態度を取って」
イケメソは私の肩に両手を置いた。
「私は、あなたがどんな人間であるかよく理解しております。その上で、あなたの人生をよい方向に導いて差し上げるつもりなのです。これはすべて善意によるもので、報酬をいただくつもりもございません。こんな私を歓迎しこそすれ、冷遇する筋合いはないかと思いますが」
彼の言葉は、弱りきった私の心を動かすのに充分な強さを持っていた。
「本当に？　本当にあなたを信用していいの？」

第九話

「もちろんでございます」
次の瞬間、イケメソの顔面に私のパンチがめり込んだ。
「なっ、何を……」
イケメソがその場に膝をつくと、私は彼の前にヤンキー座りをした。
「あなたの私に対する意見は、たぶん合ってると思うよ。でもね、やろうとしていることには賛成できない」
「どうしてですか」
「だって、インチキ宗教の勧誘でしょ？　　人が弱ってるところにつけ込んでさあ」
「そんなことはありません、私は純粋に」
「純粋にインチキ行為がしたいわけね、このインチキ」
イケメソは何度も首を振ったあと、私の下半身を指さした。
「女性が男性の前で足を開くのは、はしたないと思います」
再び、私のパンチが彼の顔面にめり込んだ。
「お前にだけは言われたくないわ、腐れ変質者！」
イケメソはしばらく顔を押さえた後、やにわに立ち上がった。
「どうやら私の言うことを信じていないようですね。それでは、これから神の力をお見せしましょう」
「どうせ下手な手品でもやるんでしょ、このインチキ」
イケメソは福袋に底手を突っ込み、肉と野菜とカレールーを取り出した。
「これを、わずか三分でカレーにしてみせます！」
「神なら一秒でやれよ、インチキ」
イケメソはさらに、袋からピストル型の機械とビニール袋を取り出した。何をするのかと思いながら観察していると、彼は野菜をビニール袋の中にほうり込んだ。
「イケメソ三分クッキング、始まり始まり！　　皆さん、盛大な拍

手を！」
ここで拍手などしたら、奴が図に乗ってさらなるインチキをしでかしそうなので無視した。
イケメソは何か言いたげにこちらを見つめた後、ビニール袋の中にピストルを突っ込んで叫んだ。
「アシッドスプラーッシュ！」

第十話

すると、ピストルの先から透明の液体が噴き出した。どうやら、あれは水鉄砲だったらしい。
液体はどんどんビニール袋の中にたまり、やがて一杯になった。
「よくご覧ください！」
見たくもなかったが渋々見てあげると、野菜の皮が全部むけていた。
察するに、あの液体が溶かしたのだろう。
イケメソは「どうだ」と言わんばかりに、袋を前に突き出した。
「この通り、神が奇跡を起こしました！」
「何がどう奇跡なわけ、このインチキ」
「今の技はインドの神話で『インドラの矢』と呼ばれ……」
「『インチキの矢』でしょ、このインチキ」
イケメソは何か言いたげにこちらを見つめた後、今度は透明な箱を取り出した。その中には刃物らしきものが見える。
「さらなる奇跡を起こしてみせます」
彼は無造作に野菜を突っ込み、スイッチを入れた。
「ジェノサイドブレード！」
途端に中の刃物が回り出し、野菜をバラバラに切り裂いた。
「今のは別名『ハルマゲドン』と……」
「いいから次にいってよ、インチキ。いい加減飽きてきたから」
イケメソは無言でこちらを見つめ、今度は巨大な鉄鍋を取り出した。
「いよいよフィニッシュです。ご期待ください！」
「もう三分過ぎてんだよ、インチキ」
彼は野菜と肉、カレールーを鍋にほうり込んだ。
「カウントダウン、プリーズ！」
「うっせえよ、一人でやれインチキ」
イケメソはぶつぶつ言いながら、一人カウントダウンを始めた。
「スリー！　トゥー！　ワーン！　『アトミックボンバー』

！」
次の瞬間、すさまじい爆発音が部屋中に響き渡った。思わず耳を塞ぐと、続いてイケメソも耳を塞いだ。彼が持っていた鍋は当然ながら床に落ち、出来たてのカレーが床にこぼれた。
「あっ……」
イケメソは呆然としながらつぶやいた。
「カレー、こぼしちゃった」
「バカー！　アホー！」
「今までの一連の流れを、北欧神話で『ラグナロク』と言い……」
「お前もラグナロクで死んでしまえ！」

第十一話

それにしても、カレーを五分とかからずに作ってしまったのはすごい。神がどうたらという話は嘘に違いないが、彼の力を利用しない手はなさそうだ。
「ところでさあ、他に何ができるの」
「なんでもできます」
「本当になんでも？」
「はい」
「本当に？」
「くどいですね」
「じゃあ、そのこぼれたカレーを元に……」
「あっ、ちょっと今は体調がすぐれなくて」
どうやら、万能ではないらしい。
ここで私は、ムカエルの存在を思い出した。ずっと姿が見えないが、一体どこへ行ったのだろう。
「あのカエルはどうしたの、消えちゃったけど」
「さあ、私にもさっぱり」
立ち上がって周囲を見回そうとしたとき、足の裏に妙な感覚があった。不審に思いながら左足を上げてみると、ムカエルが潰れている。途端に、全身から血の気が引いた。
「きゃあああ、嫌あああ！」
私が叫ぶと、イケメソが近寄ってきてムカエルを持ち上げた。
「総統、なんとおいたわしい姿に！」
「ちょっと、何してんの。早く捨ててよ！」
「そんなことはできません！」
イケメソは、福袋の中から円筒型の瓶を取り出した。中には透明の液体が入っている。
「どうするつもりなの」

「言うまでもありません！」
彼は瓶のふたを開け、ムカエルを液体の中にほうり込んだ。ホルマリン漬けにでもするつもりだろうか。
じっと瓶の中を観察していると、死んだはずのムカエルの足がぴくぴくと動きだした。
「何これ、キモい！」
「再生液です。総統は体の作りが非常に簡単でして、こんなものでも生き返ることができるのです。こうしてカエルは生きカエル」
「なんか、軽い命だね」
「あの、カエルが生きカエル」
「うるさい、死ね」
がっくりとうなだれているイケメソをよそに、ムカエルは息を吹き返して瓶から出てきた。
「うむ、危ないところであった」
「そのまま死んでもよかったのに」

第十二話

「それは困る。私はこう見えてもカエルなどではない、総統なのだ。死んでしまったら……」
「あれ、神じゃなかったの」
するとムカエルはしばらく黙り込み、やがてこうほざいた。
「私は、神だ」
「嘘つけええっ！」
「それはさておき、イケメソの真骨頂は見たのか？」
私は首をかしげた。
「何それ、カレーを作ること？」
ムカエルはクエッ、クエッと鳴いた。どうやら笑っているらしい。
不気味すぎて潰したくなる。
「そんなことではない。イケメソ、見せてやったらどうだ」
「総統がそうおっしゃるのでしたら」
何が始まるのかと思いながら見ていると、イケメソは福袋から香水の瓶を取り出した。
「高価なので、あまり使いたくないのですが」
「能書きはいいから、さっさとやってよ」
彼は、香水を自分の全身に何度もふりかけた。
「つけすぎじゃないの、それ」
「このくらいつけないと効果がないのです。ところで、何か感じませんか？」
「香水つけすぎで超臭いって感じるけど」
イケメソはしばらく首をかしげた後、私の顔をのぞき込んだ。
「おかしいのは性格だけじゃなかったんですね」
「なんだと！」
イケメソの顔にビンタをかますと、彼はずれた紙袋を直しながら頭を下げた。

「どうもすみませんでした、これが効かない方は大変珍しいので」
「これって？」
「テンプテーション・フレグランスとでも言いましょうか」
「日本語で言ってよ、頼むから」
「女の子たちが俺に惚れちゃうぜイエーイ、って言う香水です」

第十三話

一体、それがなんの役に立つのだろう。
「女の子たちがあなたに惚れると、どういうメリットがあるわけ」
「今にわかりますよ。では、出かけるとしましょうか」
「出かける？」
「私とデートするのです」
こんな変質者と一緒に歩いたら、私まで変に思われるんじゃないだろうか。いや、今でも近所の人たちには思われてるけど。
「さあ、行きましょう！」
「えー、なんかやだ」
イケメソは嫌がる私の手を引っ張り、無理矢理外へつれ出した。
「行きたくないよー、変な目で見られるのやだよー」
「できるだけ人の多いところに行きましょう」
「やだって言ってるじゃんよー」
「向こうに駅がありますね。そっちに行ってみましょうか」
こいつ、全然人の話を聞いてねえ。
渋々並んで歩いていくと、前方から女子高生の三人組がやってきた。いきなりまずい展開だ。これで例の香水が効かなかったら、こいつを置いて逃げだそう。
女子高生たちは、こちらを見た途端に硬直した。当然だ。全身タイツを着て紙袋をかぶった人間が歩いていたら、誰だって驚くだろう。やがて彼女たちは、ひそひそと相談を始めた。一人は携帯を取り出している。これは通報の流れに違いない。思わず逃げだそうとしたそのときだ。
女子高生たちが表情を和らげ、こちらに近づいてきた。さては、捕まえて警察に突き出すつもりなのだろうか。無言でようすを見ていると、彼女たちは笑顔でイケメソに話しかけた。その表情に、まったく敵意は見られない。

ひたすら驚いている私を尻目に、三人と変質者一匹は談笑している。
そのうち、一緒に写メを撮りだした。どうやら、あの香水の効果は本物らしい。

第十四話

周囲を見回すと、いつの間にか人だかりができていた。そのほとんどが十代から二十代と思しき女性だ。イケメソは彼女たちの熱い視線を一身に浴びながら、にこにこと愛想を振りまいている。まるで、イケメン俳優が街に現れたかのような現象だった。

私が全盛期の頃でさえ、これほど異性にモテたことはなかった。なんだか妬ましい。この全身タイツの変態野郎が、なんだかものすごく妬ましい。

心の中で「バーカ、バーカ」と叫んだが、当然奴には届かない。イケメソは「いやあ、困ったなあ」などとほざきながらにやついている。これは、一発どついて目を覚ましてやった方がよさそうだ。

彼に向かって身構えた瞬間、誰かに背後から突き飛ばされた。

「ちょっ、誰……」

眉を吊り上げてにらみつけると、二十歳くらいの女性だった。私は彼女の派手さにたじろぎ、後ずさってしまった。

スプリングパーマの金髪やスパンコール付きのタンクトップに加え、顔がすごい。アイシャドーにアイライナー、チーク、マスカラにファンデーション、二重のつけまつ毛。基本的に薄化粧の私から見れば、五目ラーメンにチャーシューを何枚も重ねたような豪華さだ。これだけケバいくせに「かわいい私」を演出したいらしく、チェリーピンクのルージュなんぞ引いている。唇はつやつやのぷるっぷるだ。よほど質のいいリップグロスを使っているらしい。

彼女は、周囲にいる人たちを押しのけてイケメソの前に立ちふさがった。他の女性など、まるで眼中にないようだ。

「ねえねえ、そこのイケてる彼氏ー」

派手な女は猫撫で声を出した。「イケてる彼氏」とはイケメソのことらしいが、本当は「イケ」という二文字しか共通点がない。

「あたしさー、超ヒマなんだよねー。一緒に遊び行かなーい？」

第十五話

「イケてる彼氏だって？　嬉しいことを言ってくれるね」
イケメソは紙袋をかぶっているので、私はその顔を見ることはできない。だが、こいつが鼻の下を伸ばしながらにやけまくっているのは想像がつく。奴の鼻の穴に指を突っ込んだ上でビンタしまくってやりたい。突っ込んだ指は、もちろんアルコールで消毒するつもりだ。
「なぜ指を突っ込むのか」と聞くのは愚問と言える。
なぜ、人は山に登るのか。
そこに山があるからだ。
なぜ、人は指を突っ込むのか。
そこに穴があるからだ。
……ときどき、自分自身がわからなくなる。
それはとりあえず置いておいて、先にこの女だ。いきなり私を突き飛ばしてイケメソをつれていこうとするなんて、ケンカを売っているとしか思えない。こんな粗大ゴミを持っていかれたところでなんとも思わないが、許せないのは彼女の態度だ。いくらなんでも我慢できることとできないことがある。
私は、眉間に皺を寄せながら言った。
「ちょっと、あんたさあ」
「なんですか」
「なんですかじゃないでしょ、ケンカ売ってんの？」
すると、彼女は私の上から下まで眺めてから鼻で笑った。いよいよムカついてしょうがない。
「何笑ってんだよ」
「すっぴんババア」
「は？」
「すっぴんババア」

その言葉の意味を理解した途端、全身から血の気が引いた。私はノーメイクで外を歩いていたのだ。
今日は家でごろごろしているつもりだったので、化粧をしていなかった。ちなみに今、眉毛がほとんどない。剃ってしまっているからだ。外出するときには眉毛を描いてからでなければならないのに、それをすっかり忘れていた。
おまけに、着ているのは色あせて薄汚れたTシャツだ。こんな恰好で外に出るなど、自殺行為以外の何物でもない。
ひたすら縮こまっていると、女がにやにやと笑いながら言った。
「あんた、なんなの？　　まさか彼女とか言わないよね」
「いえ、その」
「違うんなら引っ込んでてくれない？　　マジウザいんですけど」

第十六話

素晴らしい。
ここまで傍若無人で、かつムカつく女を見たのは生まれて初めてだ。こいつに大量のロケット花火をくくりつけて、宇宙の彼方へ飛ばしてやりたい。「ロケット花火じゃ大気圏にすら届かねえだろ」などと笑う奴も一緒だ。ついでに私より美人な女、私より年収の高い女、私より若い女、既婚者もしくは彼氏がいる女……
地球から女性がいなくなってしまうので、この辺でやめておく。世の中の女たちは、寛大な私に心から感謝してほしい。って言うか、命を救ってもらったお礼として高級スイーツの一つも持ってくるがいい。わらわは、ゴディバのチョコが所望じゃ。
なんだか、話が果てしなく脱線した。私の悪い癖だ。
目の前の派手な女は、眉を吊り上げてこちらをにらみつけている。なんとかこいつに一泡吹かせてやりたいが、今の私には無理だと思う。何せ、すっぴんに汚れたTシャツという出で立ちなのだ。今ここにいるだけでも恥ずかしいのに、こんなキツい女と正面きって争う余裕などない。
沈黙していると、女はイケメソの腕をつかんで引っ張った。
「ねえ、行こうよー」
そのとき、周囲の女性たちから抗議の声が上がった。
「ちょっと、いい加減にしなよ！」
「調子に乗りすぎでしょ、この子」
「何様のつもりだよ」
すると、彼女は目をむいて怒鳴った。
「今文句言った奴、前に出ろ！」
ぶうぶう言っていた人たちは一瞬で沈黙した。「こいつはヤバい」ということを理解したらしい。ちなみに私もその一人だ。これ以上逆らうと虐殺されそうな気がする。

第十七話

すっぴんババア呼ばわりされたのは実にくやしいが、こんな危険な女に関わって怪我をするのも嫌だ。ここは、涙を飲んで撤退しよう。イケメソなんかどうなったところでかまわないし、イケにえとして差し出してしまえばいい。

こっそり立ち去ろうとした矢先、イケメソが女に向かって話しかけた。

「君は魅力的な人だと思うよ」

彼女は、うんうんとうなずいている。できることなら、あの横っつらをひっぱたいてやりたい。

イケメソはさらに続けた。

「でもね、君より数倍、いや数百倍魅力的な人がいるんだよ」

周囲の人たちが一様に目を見開く中、派手な女は真っ青な顔をしながら言った。

「誰よ、そいつ。どこにいるの！」

本当に、どこにいるんだろう。まさか、口から出まかせなんじゃないだろうか。何せイケメソだし、どんな適当なことを言ってもおかしくない。

興味津々で見ていると、こともあろうに彼は私を抱き寄せて言った。

「この人だよ。世界でただ一つの、僕の太陽なんだ」

周囲から驚きの声が上がり、ついでに私も声を上げた。この変質者ときたら、とんでもない嘘をでっち上げたものだ。って言うか、キザなセリフが果てしなくキモい。

派手な女に視線を移すと、涙目になりながらぷるぷると震えていた。今にも泣きだしそうな勢いだ。思わず声をかけようとすると、彼女は私を上目使いににらみつけて言い放った。

「死ね！」

唖然としているうちに、女は大股で歩き去った。後にはイケメソと私、ギャラリーが残された。

第十八話

私は、大嘘つきの変質者に声をかけた。
「あのさあ、なんでそんな適当な……」
その途端、イケメソに口をふさがれた。やがて、彼はギャラリーを見回しながらこうほざいた。
「今言った通り、僕にはこの人しかいないんだ。だから、悪いけど君たちの気持ちには答えられない。本当にごめんね」
周囲の視線が私に注がれた。なんだか生きた心地がしない。さっきみたいに「死ね」とか言われたらどうしてくれるんだ、このボケメソ。
ひやひやしながら縮こまっていると、一人の女の子がつぶやいた。
「いいなー」
それに呼応するかのように、他の人たちからも声が上がった。
「うらやましーい」
「私もそんな風に愛されてみたいよ」
「こんな超イケメン、他にいないよね」
私は、自分が羨望の眼差しで見つめられていることに気づいた。悪くない。それどころか、かなりいい。こんな気分になったのは久しぶりだ。
イケメソが、私の頭を優しく撫でながら声をかけてきた。
「気分はどうだい、マイハニー」
「いいかもしんない」
ムカエルが言っていた「イケメソの真骨頂」の意味が、ようやくわかったような気がした。そんじょそこらのイケメンでは、こんな芸当はできない。
その日から、二人と一匹の共同生活が始まった。会社から帰ってくると、イケメソが温かいご飯を作って待っていてくれる。愚痴

りたいときは、ムカエルが聞いてくれる。気分がふさいでいるときは、イケメソがデートにつれ出してくれる。一人で暮らしていた頃とは比較にならないほど、私の人生は明るく楽しいものになった。

それはそれとして、疑問がある。この人たちは、なぜ私のところにやってきたのだろう。なぜ優しくしてくれるのだろう。

彼らに理由を尋ねても、固く口を閉ざしてしまう。よほど知られたくないようだ。だが、私はどうしても知りたい。そこで一計を案じた。

第十九話

その日、会社から帰ってきた私は、カクテルを飲みまくった。
「お嬢様、飲みすぎは体に毒ですよ」
「大丈夫、大丈夫。あははは」
結局、私は酔い潰れて寝てしまった。しかし、実は演技だ。目をつぶってはいるが、しっかり起きている。
わざと大きな寝息を立てていると、イケメソがぽつりと言った。
「よく寝てますね」
すると、ムカエルが答えた。
「うむ、そうだな」
「今のうちに始末してしまえばよろしいのでは？」
始末とは穏やかでない話だ。やはり裏があったらしい。見ず知らずの人間のところにやってきて善行を施すなんて、どうも怪しいとは思っていた。
「最初にそれを考えたのだが、できないのだ。我々ケロル星人が開発したスーパーコンピューターで予測してみた結果、九十パーセント以上の確率で返り討ちにあうと出た」
「ケロル星のコンピューターの予測的中率はいくつでしたっけ」
「九十九パーセントだ」
イケメソはため息をついた。
「残念です。しかし、本当にこの女がそんなに優れた戦士なのでしょうか」
「戦士なのか指導者なのかわからん。ただ、これだけは言える。我々が五年後に予定している地球侵略の際、この女が最大の障壁となって我々の前に立ちはだかる」
「それもコンピューターの予測ですか」
「その通りだ」
私は、全身にじっとりと汗をかいていた。この連中は、かなり

危険な敵に違いない。地球にやってくることができた時点で、科学力は相当なものだ。しかも、すでに日本語がペラペラときている。おそらく、かなり綿密なリサーチをしてきたのではないだろうか。イケメソが私の個人情報をつかんでいたのも、今となってはうなずける。

それにしても、優しくしてくれた理由がわからない。私は彼らにとって敵であるはずだ。味方のふりをしてばっさり斬るという選択肢はないようだし、何が目的なのか理解しかねる。

寝たふりを続けていると、ムカエルが再び話し始めた。

「敵であるにも関わらず排除することができないとは、本当に困った存在だ。だから、こうして彼女を懐柔してしまおうというわけだよ」

「味方に引き込んでしまおうというわけですね」

第二十話

私はここで、むくりと起き上がった。
「話は聞かせてもらったよ」
ムカエルとイケメソは目を見開いた。
「怪しいとは思ってたけど、ここまで危険な人たちだとは思わなかったよ。一緒に暮らしてた自分のバカさ加減に呆れるね」
ムカエルが穏やかに言った。
「聞かれてもかまわん、どうせいずれ打ち明けようと思っていたからな。それで、どうだ。我々の仲間にならないか？　そうすれば将来戦争になったとき、貴様の命は助けてやろう」
私は鼻で笑った。
「お断りだね。私が地球人を裏切るとでも思ってたの？　あなたたちのコンピュータで計算してみなよ。『百パーセント失敗』って出るからさ」
ムカエルは目をしばたたいた。
「おかしい、こんなはずはない。予測の結果、貴様が我々の味方になる確率は九十八パーセントだったのに」
「じゃあ残りの二パーセントに当たったか、コンピュータがポンコツだったんだよ」
ムカエルは目を閉じて沈黙した後、おもむろにこう言った。
「遺憾ながら、任務は失敗した。これより帰還する」
言い終わった途端、彼の体がどんどん透けていった。
「ちょっ、どうなってるのこれ！」
わめいているうちにムカエルの姿は完全に消え去り、イケメソと私だけが残された。
「あなたも帰れば？　交渉は決裂したし」　彼は私をまっすぐに見つめた。
「今だから言うが、俺はイケメソなどと言う名前ではない」

「そうだろうと思ったよ、そんなバカみたいな名前なわけないよね」
　彼は、福袋から長細いものを取り出した。よく見ると日本刀だった。
「何それ、まさか私を斬るつもりじゃないよね？」
「斬るのではない、消すのだ」

第二十一話

「消すって、消しゴムじゃあるまいし」
「お前が本当に障壁になるのか確信はないが、災いの芽を摘んでおくに越したことはない。消えてもらう」
イケメソは、すらりと刀を抜いた。どうやら本気らしい。
私は、近くに転がっていた鍋を手に取って投げつけた。彼がそれを斬りつけた瞬間、鍋は一瞬で雲散霧消してしまった。これ以上ないほど危険な武器だ。
私は続けざまにバッグを投げつけた。さらに、イケメソがこれを斬りつけている間に外へ逃げだした。玄関にあった二本の傘を持っていくのも忘れない。残念ながら、武器として使えそうなものはこれしかないのだ。
アパートの扉を開けて外に出ると、黒いスーツを着た二十代半ばと思しき男性と鉢合わせした。私は彼に向かって叫んだ。
「警察を呼んでください、変質者がいるんです！」
私はそう言い残し、アパートの廊下を走った。イケメソが後からついてくる。恐ろしいほどの足の速さで、到底引き離せそうもない。
私は覚悟を決め、アパートの前の道路で彼を待った。イケメソは刀を上段にかまえ、じりじりと近づいてきた。
「悪く思うなよ」
「悪く思うに決まってるじゃない、ふざけないでよ」
私も二本の傘をかまえた。高校生のとき全国大会で暴れ回った剣の腕を、再び披露するときが来たようだ。
双方にらみ合うこと数分、先に動いたのはイケメソだった。彼が地を蹴った瞬間、その剣は早くも私の眼前に迫っていた。
「速っ！」
体をひねって辛くもかわしたが、奴は間髪入れずに斬りつけて

くる。相当な使い手だ。私は少しずつ後退しながら、必死に斬撃をかわし続けた。

第二十二話

「しぶとい奴だな、いい加減にあきらめろ！」
私はそれに答えることなく、左の傘で殴りかかった。イケメソはこれを剣で受け止め、傘が一瞬で消え去った。しかし、これで終わりではない。私の放った横薙ぎの一撃が、奴の腹に迫っていた。
完全に捕らえたはずだったが、彼は瞬時に後退してかわした。それでも攻撃は止まらない。私は、かわされた状態から一瞬で突きに転じた。
「やあっ！」
かけ声と共に、傘の先端がイケメソの顔面を直撃した。私は相手がよろめいた瞬間に間合いを詰め、その手首に手刀を叩きこんだ。
「うぐっ！」
イケメソは、叫びながら剣を取り落とした。私はそれを拾い上げると、奴を真っ向から斬り下げ……
斬り下げようとしたが、やめた。剣は彼の眼前で止まっていた。
イケメソは全身を硬直させながら、私を見つめた。
「……なぜだ、なぜ止める。お前は勝ったのだ。さっさと殺せ」
私が無言で剣を引くと、彼はまくし立てた。
「まったく理解できない。恩を売ったつもりなら無駄なことだ。ここで俺を助ければ、お前は一生後悔するぞ」
私は微笑んだ。
「あなたにも、人生があるでしょう。それを奪いたくない」
イケメソが沈黙したのを見て、さらに話し続けた。
「私の最近の人生は、本当につまらないものだった。『死にたい、死にたい』って思ってたよ。でも、あなたたちがそれを変えてくれた」
「馬鹿な話だ、それはすべて演技……」
「演技だったとしても、嘘だったとしても、私は嬉しかったよ」

「だからなんだと言うのだ」
「これから先、あなたにも楽しい人生を歩んでほしい」

第二十三話

　イケメソは何度も首を振った。
「その感情は、やはり理解しがたい。ただ」
「ただ？」
「お前が優れた戦士であるということは、身をもって理解した。それに敬意を表する」
　彼は右手を差し出した。
「日本人は、こうやって友好の意思を表すのだったな」
　その手を握ると、彼は穏やかな声で言った。
「俺はカリスト星の第一空挺師団長、イ・ケメーソだ」
　私は思わず吹き出した。
「イケメソとたいして変わらないじゃない」
「お前の名は？」
「池谷。池谷真紀」
「イケタニか、いい名だ」
　イ・ケメーソはそう言いながら、顔の紙袋に手をかけた。
「最後に、俺の顔を見せておこう」
「ちょっと、外気に触れたら死ぬんじゃないの？」
「あれは嘘だ。地球人に、自分の姿形を見せたくなかっただけだ」
　紙袋を取り外した彼の顔を見て、私は息を呑んだ。
　光輝く金髪、透き通るような白い肌、どこまでも澄んだ青い瞳、完璧に調った目鼻立ちに輪郭。世紀の美男子がそこにいた。
「さらばだ、イケタニ。いずれ、また会うときが来るだろう。お前のことは忘れない」
　彼の姿は段々と消えていき、とうとう何も見えなくなった。私はしばらく呆然とした後、つぶやいた。
「あの変な香水、いらなかったんじゃ……」

第二十四話

私は、自分の部屋に向かってのろのろと歩きだした。もうイケメンたちはいない。また元の平凡な生活が待っているのだ。

そのとき、誰かに声をかけられた。視線を向けると、黒いスーツを着た男性が立っている。さっき部屋から出たときに鉢合わせした人だ。短い黒髪に引き締まった顔をしており、なかなかの好青年に見える。

彼はにこにこと笑いながら言った。

「どうやら、ケロル星人とカリスト星人を撃退されたようですね。さすが真紀様、私が見込んだ通りでした」

私は首をかしげた。

「どちら様ですか」

「申し遅れました、こういう者です」

彼が差し出した名刺には、「国際宇宙研究所研究員　星野誠」と印字されていた。

「私は今まで、ケロル星人とカリスト星人の動向を監視しておりました。私どもが所有しておりますスーパーコンピューターの予測によれば、彼らは近いうちに地球に進攻してくるらしいのです」

私は「またコンピューターか」とため息をついた。

「それで、何のご用ですか」

「あなたは彼らと直に接した貴重な人間です。ぜひ、研究に参加していただきたいのです」

「参加したところで役に立ちませんよ」

「声をかけた理由は、それだけではありません。スーパーコンピューターの予測によると、彼らが進攻してきた歳にあなたが最大の障壁になるらしいのです」

「それで？」

彼は顔を紅潮させながらまくし立てた。

「あなたを最強の人間兵器として、改造させていただきたいのです。もちろん、あなたにも相応のメリットがあります。様々な手術によって肉体を二十歳相当まで若返らせること、望むだけの報酬を差し上げることをお約束します」

私は首を振った。

「やだよ、そんなの」

第二十五話

「私のような若造がこんなことを言っても信用されないかもしれませんが、これは極秘の国家プロジェクトなのです」
「知ったことじゃないよ、国家のために個人を犠牲にしないでくれる？」
　星野はしばらく沈黙した後、また口を開いた。
「あなたは、最近つまらない人生を送っておられたではないですか。そんな最低の人生から脱却するチャンスですよ。参加していただければ報酬も手に入りますし、若返ったあなたならいくらでも男性をものにできるでしょう。それに……」
　言い終わらないうちに、私のパンチが星野の顔面にめり込んだ。すると、彼は涙目になりながら後ずさった。
「何するんですか！」
「最低の人生とは言ってくれるよね。私には、ただ一つの大切なものなんだよ」
「だから、その大切なものを充実させるために……」
「私は学んだよ。降って湧いた幸せなんて、いつしか跡形もなく消え失せてしまう。今回のイケメンたちのようにね。だから私は、自分で本当の幸せを手に入れる。自分自身で人生を切り開いてみせる」
　星野は何か言いたげな顔をしたが、結局押し黙った。私は彼を残し、自分のアパートへと帰っていった。
　まだあきらめるのは早すぎる。本当の人生はこれからだ。
　私の全身は、天を焦がすほどのエネルギーに満ち溢れていた。
（了）

＞ｉ２５９４８｜１２７０＜

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6123l/

イケメソ

2011年7月12日11時33分発行